上海・蘇州・無錫
～忘れていた唄～（4）

日本の領土の二十六倍、人口も十二億を超える巨大な中国。北、京、上海以外にも人口が五百万人前後の都市がたくさんある。

その中で、蘇州だけが私の頭の中に色濃く刷り込まれていたのはなぜだろうか。東洋のベニス「水の都」「庭園都市」以外のことで蘇州の名前を覚えたような気がするが思い出せない。

この原稿を書き始めた翌々日の未明、夢心地のベッドの中で思い出した。「蘇州夜曲」…この唄が私に蘇州を記憶させていたと思われる。

中国の旅に出る前にこの唄を思い出し、蘇州夜曲の歴史的背景などを少しでも調べていれば「寒山寺」などがもっと興味深いものになったであろうと悔やまれた。

「蘇州夜曲」は昭和十五年、日本の中国侵略を正当化するための国策映画「支那の夜」の挿入歌として作られた。

支那の夜は昭和十三年、渡辺はま子が歌って大ヒットし、同名の映画の主題歌となった。戦後は「支那」が差別用語とされ、ラジオ、テレビで「支那の夜」は聞けなくなった。それでも昭和十五年生まれの私がメロディーを覚えているほどの大ヒットだったらしい。

一方、西条八十作詞、服部良一作曲のコンビでつくられた挿入歌「蘇州夜曲」も主演の李香蘭（のちの山口淑子）が歌い、大ヒットした。

その後、昭和二十八年の東宝映画「抱擁」の主題歌として「蘇州夜曲」が歌われて再びヒットした。私が聞いたのは多分、戦後のヒットの際のものだろう。

「君がみ胸に抱かれて聞くは　夢の船唄・恋の唄　水の蘇州の花散る春を　惜しむか柳がすすり泣く」（戦前のヒットの際は「恋の唄」ではなく「鳥の唄」だった）

蘇州夜曲の三番に「涙ぐむよなおぼろ月に　鐘が鳴ります寒山寺」とある。日本人が大勢、寒山寺を訪れるようになったのは蘇州夜曲で歌われるようになったからだとも言われる。

今でも大みそかに寒山寺で除夜の鐘を突くツアーが企画されている。

さて、寒山寺を有名にさせたのは唐の詩人、張継の「楓橋夜泊（ふうきょうやはく）」だ。確か高校時代に漢文で習った。

「月落ち烏啼いて霜天に満つ、江楓漁火愁眠に対す、姑蘇城外の寒山寺、夜半の鐘声客船に到る」

張継は役人になるための試験に何度も失敗、傷心の船旅の途中、蘇州の運河の船着地、楓橋で寒山寺の鐘の音を聞いたことを詩にした。

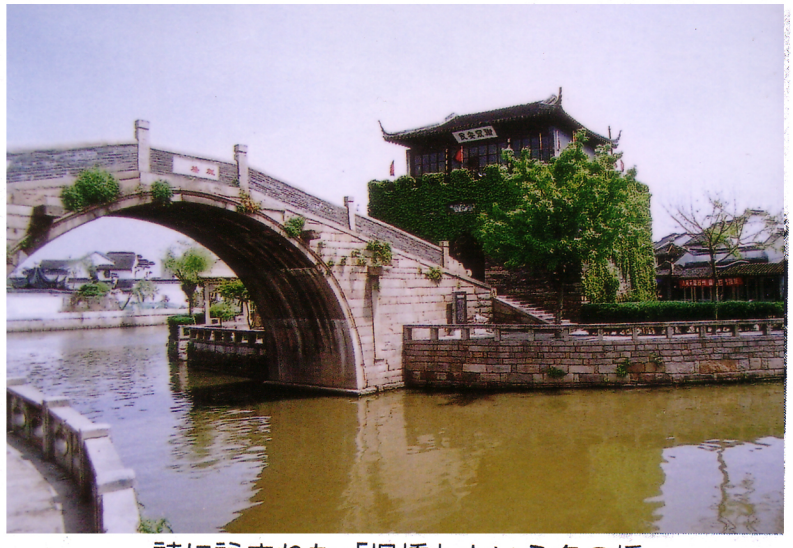
張継はその後、六十歳を過ぎて試験に合格したが、失意のどん底で書いた「楓橋夜泊」は高く評価され、唐詩の代表的詩人となり、寒山寺も有名になった。

禍い転じて福となすの実例といえよう。そのご利益にあやかろうと寒山寺の土産店でこの漢詩の書かれた扇子を買い求めた。扇子の裏には張継が小舟から楓橋の橋の向こうの寒山寺を眺めている姿が描かれている。何となく詩の意味が伝わってくる。

六十歳を過ぎても国家試験に挑戦とはあっぱれ!!なお、現地ガイドは「蘇州夜曲」については一言もなかった。

（元山口放送取締役ラジオ局長）

寒山寺の張継の詩の石碑＝同行の近藤氏と


詩に詠まれた「楓橋」という名の橋